

Topに  
聞

丹青社の社長に4月26日付で就任した。リアルな空間作りを担うだけに、コロナ禍は大きなダメージとなった。ようやく活気を取り戻したマーケットで、ここからの再生や変容への対応を急ぐ。

(田村光龍)

■ コロナ禍は、私のキャリアの中でもバブル崩壊やリーマンショックを超える最も厳しいものでしたが、ようやく前向きにシフトできるようになりました。原材料費の高騰などはありませんが、事業を再生、復活させたいと思っています。

商業、イベント、文化の空間を作る私たちの事業は、建築物に魂を入れるものです。営業をかけてクライアントの要望を聞き、パー

## 丹青社社長 小林統氏



トナーのみなさんとデザインして製作するという業界特有の形態であることも含めて、人材でもってこの会社と言えます。ですからここでもまずは人的資本への投資が重点になります。

力を注ぐのはBIM（建築物の属性情報を併せ持つ建物情報モデル）の活用です。3Dパースやウォークスルー動画でイメージの共有がしやすくなり、修正含め齟齬なくプロジェクトが進められるようになります。一気通貫でやることで課題ですが、業界でいち早く取り組んでいると自負しており、デザイン部門に浸透、製作部門へ

## 本業支える新規事業育成

広げる準備ができたところです。慣れば効率が高まり、人が有効に機能する環境につながります。

■ 事業領域としては、機能

でもシェアでも博物館などの文化施設関連はアピールできる場所と思っています。当面、ホテルやオフィス、さらにはスタジアムやアリーナといったものが期待されますが、基盤は商業関連です。少しずつでも大きくしていきたいと思っています。

一方で新規事業の育成を重視しています。空間作りを幹とすればそこから芽を出し、枝にしていきたいということ、まったく別の事業をやるわけではありません。ただこれまで本業一本やりでした。そこからは広げたいと思っています。

一つは東京都心の中小規模築古不動産の再活性化です。物件をいったん買い取ってリノベーションし、賃貸あるいは売却して収益化するもので、「W2」の名称で展

開が始まっています。空間作りのノウハウを生かし、壊さずに再生することで循環型経済に寄与できると思っています。

■ 建材・装飾材の廃番品を専門に扱うEC「フォーアース」も、廃棄物を減らすことにつながります。メーカーが抱える廃番品の活用を促しており、21年4月に10社の参画で始まりましたが、今年5月には40社に広がりました。

19年に立ち上げた「ビーオウンド」はブロックチェーン技術を活用し、作家と購入者をつなぐ工芸作品のオンラインのプラットフォームです。常設ギャラリーを設けるなどリアルとの連携も広がっています。インバウンド（訪日外国人）に向けた博物館巡りのアプリ「ザ・トウキョウ・パス」といったものもあります。

オンラインの広がりは無視できません。しかし、例えばメタバース（インターネット上の仮想空間）にシフトするということではありません。リアルな付加価値を高めるもの、本業をサポートするものを追求します。

## まず人的資本への投資